恒星地に堕ち給う

久保　トミ子

恒星地に堕ち給う――吾はただ、病床に泣けど足のたたざり。

私は正倉院の御物拝観に毎年のように出かけていた。展示物の中に、不明の御物があると、帰宅してから電話で、渡辺先生に教えを請うた。先生はいつも親切に解明して下さった。その時、大分の県立図書館の二階で、毎月第一土曜日の午後一時半から、中世古文書の研究会があることを教えて下さった。

私はさっそく入会したが、女性はまれで、いてもすぐに退会していまい、私は一人であった。私は変人と他の人々から思われていたかもしれないが、少しも気にしないで、毎月汽車で中津から通った。そのうちに三光村の乙咩政巳氏の御好意にあまえ、車に乗せて頂き大分まで通った。

乙咩氏は私の家の近くまでは三キロメートルもあるのにと私は感謝にたえなかったが、渡辺先生も喜んで下さり、乙咩氏に「此の後も久保さんをよろしく頼むよ」と言って下さった。

講義中、渡辺先生は男女の区別、又老若の差別をされず、講義をされ、指名をされた。常に平等であられた。

すぐる年の秋、日向のカンカン原の古戦場の見学に早朝より出発、現地での学習に一同大喜びで、史跡めぐりも度々して欲しいと、全員の強い要望があった。其の後、九州管内の史蹟の現地学習が度々なされた。

カンカン原より帰りのバスの中で疲れを癒やすため、次々と各人とくいの喉が発表された。歴史学者の渡辺先生が、日向の民謡をうたわれた。朗々とした、美しい男性らしいあのお声を今も忘れることができない。

私の婚家久保家は、代々宇佐宮の神職で、古文書が多く残っているが私は少しも読めないので、祖父伊勢守正康の上京日記を渡辺先生に読んで頂いた。幕末の世相、交通、人情、経済の様子がうかがわれたものである。改めてしみじみと渡辺先生に感謝の念を捧げつつ御冥福を祈らせて頂く次第である。

（大分県地方史研究会会員）